



制限された生活を乗り越え、 見えたもの



北京日本人学校 北村 亜矢子

北京日本人学校に赴任し3度目の夏を迎えました。本校は中国の首都・北京の中心部に位置し、児童生徒合わせて約250名が在籍する小中併設校です。

赴任1, 2年目は徹底した感染症対策が行われていたため、学校内外の様々な活動が制限されたり、オンライン授業を余儀なくされたりし、そのため、子どもも大人も「過度に期待をもたない。できないことは諦め、できる範囲で息長くやる」という、ある意味逞しい考えを持つようになったと感じます。とは言え、様々な体験を通して大きく成長する子どもたちにとって「人間関係構築に必須の想像力」や「何かをやり抜いた経験から得られる自信」を手に入れる機会が少なかったことは損失と言っても過言ではないでしょう。

2023年は日常が戻ってきました。

今年度は、子どもたちの自治的活動を下支えし、途切れ途切れになっていた児童会・生徒会活動を軌道に乗せることを意識し活動しています。また、中学部の進路学習では、前期に職業人講話を複数回開催することで、生徒が、日本の外で活躍する方々の生き方に触れることを通し「自分とは何者で、どの様に社会と関わり、生きていきたいのか」を考える場をつくりました。また、今年の夏は多くの中学部生が一時帰国し高校見学に参加したり、現地のサマースクールや語学学校体験に参加したりするなど、先行き不透明で制限の多くあった時代を経験したからこそその貪欲さが学校の内外で見られます。

私自身にも大きな変化があった2年4か月でした。

授業では、私は中学部で美術と家庭、小学部で図画工作を担当していますが、子どもと一緒に授業を創り上げていく気持ちが強くなりました。子どもたちに対し「どのアプローチがヒットしたのか」や「その子なりの引っ掛かりはなにか」を作品や学習カードからだけでなく、児童生徒と直接対話することから、私が学び、次の授業に繋げていくようになりました。対面の授業だからこそできる生活指導にも遠慮が無くなり、だめなことはだめと伝え、よい姿には素直な気持ちで「素敵だね」と伝えることが、オンライン授業を経験したことでより積極的にできるようになりました。私自身が子どもたちと良好な関係を築きながら自己表現の手段を広げさせ、児童生徒自身が満足感のもてる授業ができるよう準備しています。

他にも、チームで働くことの重要性や自分の心身を大切にすること等「日本での当たり前」の大切さを実感する毎日です。

任期も残り僅かとなりましたが、子どもたちと元気いっぱい、笑って泣いて、過ごしていきたいです。



北京日本人学校校舎
3月下旬には桜が咲き、大気の良い期間は晴天が続く。



運動会に向けて
5月開催の運動会に向け、小中合同委員会で作成する様子。



小学部6年生図画工作風景